

■名古屋外国語大学現代国際学部 紀要 第12号 2016年3月

論文

南オーストラリアにおけるガーナ（Kurna）語復興・維持の意義

The meaning of Kurna Language Revival and Maintenance in South Australia

濱嶋 聡

Satoshi Hamashima

要旨

本稿では、まず、南オーストラリア植民開始以来、ガーナ部族の人たちが絶えず受けてきた生活環境の変化、アデレード、アデレード平原の死滅言語と一般的に言われてきたガーナ語の歴史と特徴、その死滅後の復興と維持、続いて現在のガーナ語教育の現状を記述し、2015年3月と9月に実施した現地調査に基づき政府の政策変更による影響、IT 活用の効果、貧困・自信喪失のサイクルからの脱却としての模範となるアボリジニ育成の早急な必要性などについて述べる。

まず、政権が変わるごとに多大の影響を受ける少数民族の言語復興と健全な維持にとって効果的な策として、David Crystal (2000) は、以下の項目をあげている：

- 1) 主流派社会内における少数言語話者の威厳、豊かさ
- 2) 主流派の見地からの少数言語話者としての真正なパワー
- 3) 教育システム内での強い存在感
- 4) IT 技術の活用

このCrystalの提言に対して、Michael Walsh (2010) は、これらのほとんどは、多分願わしいことではあるが、必ずしも成功のために必要というものでもなく、実際、オーストラリアのアボリジニ社会では達成不可能なものであると指摘している。また、彼は、オーストラリアにおける成功例として、NSW 州、Bowraville の St Mary's Primary School の事例研究を紹介しているが、その成功の原因としては以下の項目をあげている：

- 1) *Muuurbay* Aboriginal Language & Culture Cooperative と MRALC (Many Rivers Aboriginal Language Centre) の後援による適切な教育を受けた教師派遣などのプログラムの充実、
- 2) その地方の伝統言語 *Gumbaynggirr* 語のプログラムが学校の社会的公平さという状況内でうまく調和していたこと、特に *Gumbaynggirr* 語プログラムを成功に導いた多くの生徒、家族が経験していた貧困、非力さのサイクルを断ち切るために大いに貢献した校長の先見、努力、任務遂行力、
- 3) プログラムを成功させるために必要な構成要素の正しい理解、例えば、教師不足の訴えに対する *Muuurbay* Aboriginal Language & Culture Cooperative による単に生徒の学習補助だけにとどまらない教授技術の進歩発展への援助

はじめに

オーストラリア全土の先住民人口は、2011年度の国勢調査では、総人口2,150万人（2006年度に比べて8.3%の増加）中、2.5%（54万人）にあたり、そのうちの90%がアボリジニ、6%がトレス海峡諸島民で、残りの4%が両方の血筋である¹⁾。

アボリジニ人口の多い州であるニュー・サウス・ウェールズ州とクィーンズランド州にそのうちの60%が住み、反対に人口の少ない州である首都特別区には0.9%、タスマニア州には3.6%、南オーストラリア州には5.6%のアボ

リジニが住む。州全体の人口と比較してアボリジニ人口率が高い北部準州では、全人口の30%をアボリジニが占める²⁾。

また、居住地としては、75%が都市に住み、遠隔地、さらに奥地に住むのはそれぞれ9%と15%である³⁾。このような人口比率の差が、各州のアボリジニ政策に少なからず影響を与えているが、南オーストラリア州もその例外ではない。

1. ガーナの土地と人

1. 1. ガーナ語族

まず、現在のアデレードは、ガーナ・カントリイの中心であり、この Kurna という名前は、おそらく隣接する *Ramindjeri* 語と *Ngarrindjeri* 語で「人」を表す Kornar の誤称で、最初にガーナ語の言語形式を記録したとされる William Wyatttha は、アデレード平原の言語と人を表すガーナ語としては、*Miyurna* という語のほうが適切であろうということを指摘している。しかし、すでに Kurna という言葉は定着しており、2013年のガーナ語族の人々の会議でも是認されている。(Amery 2013)

O'Brien & Mandy (2013) によると、ガーナは、アデレードとアデレード平原に元々住んでいた人々で、かつてガーナ・カントリイの中心であったその地域は、現在アデレード市とその広大な公園となっている。1836年までは、何百世代にもわたるアボリジニによる手入れの行き届いた管理・保護の結果、草地と低木の広野が自然のままの状態で残り、その地域は、*Tarntanya* (red kangaroo place) から南北へ広がる平原と、東部地域との境界線となっている山脈の樹木の生い茂る丘陵までを含んでいた。

また、入植者により Torrens 川と呼ばれているガーナ語で河川を表す *Karrawirra Pari* (red gum forest river) は、水、魚などを含む様々な食料を得る重要な供給源の地域で、ガーナの人々の野営地としては何よりの適地であった。この推定人口約300名のガーナの人々は、入植者たちからはコーワンディーラ (*Cowandilla*) 部族またはアデレード部族と呼ばれていたが、他に

隣接した部族としては、南部に *Ramindjeri* 部族と *Ngarrindjeri* 部族、ヨーク岬 (York Peninsula) の *Narungga* 部族、北部の *Nukunu* 部族、北東部の *Ngadjuri* 部族、アデレードヒルズ東部の *Peramangk* 部族などが存在する。

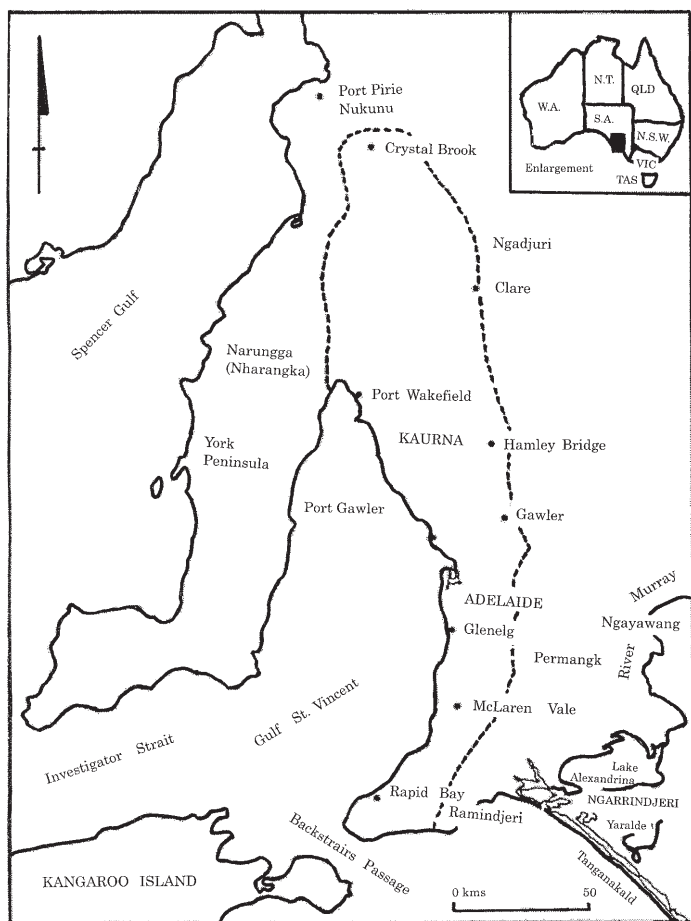


図1. Kurna Yerta (Kurna Country)

(Amery Rob. 2004. Kurna Language Reclamation and the Formulaic Method. In *Proceedings of Language is Life*, 81-99. The 11th Annual Stabilizing Indigenous Languages Conference. University of California at Berkeley June 10-13, 2004)

ガーナ部族は、彼らの洗練された文化、自然環境の深遠な知識を反映した複雑な言語を話し、相互的な関係と責任によって二分された相互補完的な半族社会を形成していた。その文化や環境について学ぶことは子供時代に始まり成人期まで続き、このような知識の獲得は個人の威信の基礎をなすものと認知されている。若者の教育は、人々の生活の中心を占め、単なる食料、道具、住居、薬（薬草）よりも重要なものであった。ガーナの霊性は、人々やその文化と植物界、動物界、天体と結びついたもので、土地は、天地創造や部族の規律について説かれた *Tjibruke* のようなドリーミング時代の先祖の痕跡とともに現在も生きている存在である。

この *Tjibruketo* と同様の存在であるウルル・カタジュタ (Uluru-Kata Tjuta) 国立公園地区のアナング (*Anangu*) 部族にとってのジュクルパ (*Tjibruke*) を例に挙げてみると、そのカルチャーセンターからのメッセージには、以下のように記述されている。

「これはアナング文化の基盤であり、行動規範、集団生活のおきてを決めるもので、部族の存在の支えとなる土地を管理する方法を定めた規律である。また、『ドリーミング』、『ドリームタイム』といった訳も適切ではなく、西洋的な意味でのドリーミング（夢の世界）については触れてはおらず、その内容は現実に基づいたものであり、夢の世界のような想像的なものでもなく、日々の生活を送るための掟を記した古代から伝わる部族の規律である。」⁴⁾

また、ベッドフォードパーク (Bedford Park) にあるガーナ文化センター (Living Kurna Cultural Centre) のアボリジニ女性の講師は、この何物も存在しない世界からアボリジニの祖先が現れ、各地を旅し、動植物や砂漠などの地形を作った創世記の話や聖霊、虹の蛇 (the rainbow serpent) の話は、*Ramindjeri* 部族、*Ngadjuri* 部族、*Kurna* 部族などによって大変良く似ていたり、異なっていたりする箇所があるが、それは各部族の住む地域、神話の中に出てくる各自の役割、規律の違いによるものであると筆者のインタビューに答えている。また、他の部族の神話を自分が語ることは適切ではな

いとも述べているが、このことは彼女がセンターへの訪問者に神話について話をする時に、少なからず影響を及ぼしていることでもある⁵⁾。

1. 2. 植民地開拓者の影響

ヨーロッパ人探検家たち、続いての海岸伝いを中心とした捕鯨者、アザラシ狩り猟師たちの到来が始まるのが1800年代であるが、ガーナの人々の生活が取り返しのつかないほどに変えられてしまったのが、1836年に開始された入植開拓であった。英国の属州である南オーストラリア州を定義した特許証には先住民アボリジニの権利を認める条項が含まれていたが、これらの権利は事実上守られることはなく最初にガーナの人々に打撃をあたえたのが入植者たちであった⁶⁾。

1. 3. 先住民居住地

1839年、ガーナの人たちをキリスト教化しヨーロッパ式様式を押し付けるために先住民居住地为設立され、その後すぐに南部にあった居住地は *Pirtawardli* (brush-tail possum home) と呼ばれる北部の川の土地帯に移された。彼らは、キャンプや新しく建設された住居に住むように仕向けられ、まもなく若い二人のドイツ人宣教師、Christian Gottlieb Teichelmann と Clamor Wilhelm Schürmann が移住して来たが、彼らはそこに先住民の学校を作り、ガーナの言語・文化の初歩的なことを記録した。Teichelmann と Schürmann は、ガーナの土地所有権システムを認め、*pangkarra* という語は、父から受け継いだ個人に所属する土地を示すものであるという記述を残しているが、それ以外にも名前が個人の土地所有を表す例として、*Mullawirraburka* をあげ、*Mullawirra* が土地名、そして接尾辞の *-burka* が長老を表し、これらが合わせて土地所有権を示すものであると書きとどめている。そして、この *Mullawirraburka* は、著名なガーナの男性で、白人入植者たちからは、“King John” と呼ばれていた。また、*Kundnartu* という女性が1840年に白人入植者と結婚した初めての女性で、植民地政府はこの夫妻に

Clare 近郊の土地を譲渡している。しかし、彼らの死後、接収されたその土地の返還を彼らの長男が幾度も要求したが、かなえられることはなかった。また、後述のガーナ部族長老で、the David Unaipon College of Indigenous Education and Research, University of South Australia 特別研究員である、Lewis Yerloburka O'Brien 博士は、彼女の曾孫にあたる⁷⁾。

1. 4. 周辺移住者へと追いやられるガーナの人々の運命

入植者たちは、アデレード平原一帯に開拓を進め、小川や肥沃な平地沿いに農場、入植地を設立し、囲いを作り、家を建て、土地の所有権の承認を要求し、1850年までには、Gawler 川から Willunga までの土地の大部分は、売却処分された。ガーナ部族は、自分たちの土地を奪われ、急速に周辺部へと追いやられ、入植者とともにまたは入植者のもとで働いたりするグループと、伝統的な生活を続けようとするグループとに分かれていった。入植者が増加するとともに、彼らが持ち込んだ様々な病気、アルコールやそれらによる生活の一変化、土地・伝統的生活の喪失などの原因によって多くの人が亡くなり、植民地政府も、ガーナ部族の人口減少を公表した。1850年代までには、アデレードに残留するガーナ部族はほとんどいなくなり、1846年以来、Kintore Avenue にあったアボリジニ学校の子供たちも Port Lincoln の Poonindie Native Training Institution に移された。1858年には、アデレード部族の生き残りと言われていた人たちのうち12名の人たちが Port Adelaide のキャンプから Willunga に新設されたアボリジニに食料や毛布を供給するための補給所へ移され、他のガーナ部族は保留地であるポイント・マクレイ (Point McLeay) やポイント・ピアス (Point Pearce) へ移る運命となったが、他には、アデレード周辺のキャンプに居残る人もいた。アデレードの主なキャンプは、1845年以降、現在の植物園北、Parklands の川岸の警察署のパドックにあったが、1874年には、キャンプ地がなくなってしまったために植物園を出て野宿していた市内のアボリジニが浮浪罪で逮捕されるという事態も起こった。その後、1870年代後半には、キャンプが再設営され、約50名

のアボリジニが Parklands や、Glenelg と Port Adelaide の間の地域にあった主なキャンプに移ってきた。そして、1880年代と1890年代には、Glenelg と Port Adelaide の2ヶ所にも主なキャンプが設立されたが、それらのキャンプにはガーナ部族も含まれていた。

1911年にアボリジニ法が制定されるとアボリジニ保護官 (the Protector of Aborigines) が、その権力をアボリジニの生活の隅々にまで浸透させた。1912年には、保護長官、William South がこの法律を盾に取ってアデレード周辺のアボリジニ・キャンプを撤去させ、キャンプ生活に戻ると収監するとアボリジニを威嚇した⁸⁾。

1. 5. 最後のガーナ語話者、Ivarityi

アデレード部族は消滅してしまったという非アボリジニの人たちの見解に挑戦する試みが、1919年から1929年までの10年間続いた。1919年に、民俗誌学者であり作家でもある Daisy Batesha が、最後の話者といわれている Ivarityi (英語名 Amelia Taylor) をインタビューし、その後、10年間、研究者、報道関係者の彼女への訪問が続いたのである。その結果なされた数多くの公表の中の 하나가、アデレードの原名である *Tarntanya* (red kangaroo place) というガーナ語であった⁹⁾。アデレードのアボリジニ人口は、第二次世界大戦以後増加し続けているが、それは、南オーストラリアのアボリジニから居住地を選ぶ権利を50年間制限してきたかつての法的条項が撤回された1962年以降からに過ぎない。教育、就職における機会を手にし、家族の近くに住むために移動するアボリジニが増加するにつれて、アデレードへ移り住む人口も急速に増加した¹⁰⁾。

1. 6. 承認と復興

アボリジニの組織が隆盛を極めるのはアボリジニに自主決定・管理権が認められた1970年代から1980年代であるが、南オーストラリアのアボリジニが自らを表す言葉として *Nunga* を使用し始めたのもこの頃である。彼らの出自

を表すものは、出身地と言語であるが、アデレード平原を代表する部族であることを自認し、ガーナ部族としてのアイデンティティを自覚する部族が再出現したのは、20世紀後半の1980、1990年代であった。先述の南オーストラリアで最初に白人入植者と結婚した Kudnartu の曾孫、Lewis O'Brien 博士は、若い時に政府の公文書保管所に入室し、約一世紀にも渡って口頭で伝えられてきた彼の祖祖母に関する家族に纏わる話や個人情報を確認し、以下のように述べている。

「私は、長い間、自分は Narrunga 部族だと思ってきたが、歴史をたどり自分も含めた数人のガーナ部族の生存者がいることに気付いた。現在、われわれの祖先にあたる時代まで家系をたどれるガーナ部族の子孫が多分、1,000人は存在するだろう。われわれは生存者であり、今でも、ここに存在し、活動しているということを考えることは実に喜ばしいことである。」¹¹⁾

このような Narrunga 部族からガーナ部族としてのアイデンティティの変化の実例は少なからず存在し、筆者がこの2015年9月に実施した聞き取り調査の協力者、Tauondi Aboriginal College のアボリジニ文化指導者、Buckskin 氏もその一人である。York Peninsula 出身の彼は、母親からガーナ部族の親族がいることを聞かされ、ガーナ語が自分の母語であることを強く意識し始めたのである¹²⁾。

また、彼を含め、多くのアボリジニは、複数のアボリジニ言語に堪能で、それ以外にも公用語としての英語も話すが、ほとんどの場合、標準オーストラリア英語とは異なるアボリジニ英語を使用している。学生もその例外ではないが、特に家庭などのアボリジニ同士では、この変種を使用するのが日常的である。アボリジニ英語と標準オーストラリア英語の違いの一部を挙げると、アボリジニ英語では、語の最初に 'h' 音がくることがほとんどなく、'he' は /i:/ と発音され、she の意味としても、it の意味としても使用される。さらに、kill は、hit と kill の両方の意味があり、例えば、"Sili бага i bin kilim

dog.”の sili は、silly、baga は、swearword の bugger ではなく person、he が語源の i は、文の主語が三人称の時（一人称：I、we、二人称：you の時を除いて）に主語に並列して使用され、bin は、過去時制を表し、kil の接尾辞、-im は、他動詞を表す。標準英語に訳してみると、“The silly fellow hit/killed the dog.”となる。（Barry J. Blake, *Australian Aboriginal Languages*, University of Queensland Press）

このアボリジニ英語が標準英語の変種として認められたのは、1960年代であるが、これを ‘Bad English’ とか劣っている英語と評価する標準オーストラリア英語話者も少なくない。しかし、アボリジニ英語は、彼らの生活・習慣に必要な方向へ変化したもので、イギリス英語から変化したオーストラリア英語とは異質のものであり、そもそも優劣をつけることが間違いであると指摘する言語学者も存在する¹³⁾。

2. ガーナ語について

この章ではまず、ガーナ語が死滅（休眠）語となった後、いかに復興・維持されてきたのか、その歴史の概略、アボリジニ諸言語のどの語族語に分類され、他のアボリジニ諸言語とはどのような点で異なるのか、2010年までは、全てのガーナ語の教材、プログラム作成時に参考とされてきた2名のドイツ人宣教師が記録した方法が、現在どのように改訂されてきたかについて述べる。

2. 1. 歴史

最も初期の語彙記録は、1826年（南オーストラリア州植民開始よりも10年前）、フランス人 Joseph Paul Gaimard の乗船していた船が、西オーストラリア南西部の流刑地として建設されたキング・ジョージ・サウンド（King George Sound）、現在のアルバニー（Albany）に立ち寄った時に、彼が、Harry という名前のみ判明していた男性と Sally という女性で、湾口付近にカンガルー島がある南オーストラリア州のセントビンセント（Gulf St Vincent）

出身の2人のアボリジニから記録したものである。彼は、168語を記録し、多くの間違い、誤解が含まれ綴りもフランス式であったが、ガーナ語であることは容易に判明する。それよりもはるかに優れて正確な記録は、1838年にドレスデンミッション協会 (Dresden Mission Society) より南オーストラリアへ派遣された Philology (ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、中国語) を学んだ前述の2人のドイツ人宣教師、Christian Gottlieb Teichelmann と Clamor Wilhelm Schürmann による3,000~3,500語に及ぶものである。それには、文法の概要、数百の文例の英訳、数編の詩、方言を例証するための短編等が含まれ、ドイツ語の賛美歌、戒律がガーナ語に翻訳された。綴り方を学んだ3名のアボリジニによって書かれた数編のガーナ語の手紙、文は、ハレ (Halle) の فرانケ財団 (Franckische Stiftung) に保管されている。そして、ガーナ語の最後の話者と認定されている Ivarity (英語名、Amelia Savage) が1929年に亡くなり、ガーナ語は1990年代まで冬眠状態に入るが、Ivarity の短い語彙リストは、1919年と1920年にそれぞれ記録されている。他の19世紀代のガーナ語記録者の中には、人格形成期をガーナ語族の子供たちと過ごした時の記憶をもとにガーナ語についての知識を書き綴った者もいる¹⁴⁾。

2. 2. 文法・語彙・スペリング

Teichelmann と Schürmann は、ガーナ語の文法諸相を記録した唯一の人物であるが、24ページに及ぶ文法概要を記述し後に追加した諸相も多くの句、文にて例証した。ガーナ語は、特に格変化が発達しておりオーストラリア北東部のパマ (Pama) 諸語ニュンガン諸語 (Nyungan) グループに入るが、他のアボリジニ諸語と異なり、代名詞の単数、デュアル(両数)、複数に加えて名詞の双数、複数接尾辞も持つ。また、他のアボリジニ諸語同様に、親族関係を表す豊富な表現方法があり、歴史的な記録を一見するだけで、その豊富さ、複雑さがわかるが、親族関係そのものの自体の記録は不完全なものである。

植民地時代 (19世紀) のガーナ語は、アデレード平原の環境、複雑な文化

を表現するのに十分な機能を果たしていた。以下のカンガルーの種類を示す数少ない記録からもその複雑さを垣間見ることが出来る。

tarnta (雄の赤カンガルー)、*kurlu* (雌の赤カンガルー)

nantu (雄の灰色カンガルー)、*wauwi* (雌の灰色カンガルー)

スペリングに関しては、2010年度までは、全ての学校のガーナ語教材・プログラムは、Teichelman と Schürmann のスペリングを採用していた。例えば、肩甲骨を表す *wiri* と棍棒を表す *wirri* に同じ *wirri* を採用し、赤黄土の *karrku* と常緑の高木、モクマオウを表す *karku* を区別せずに *karko* と表記した。歯間語と反転音の区別だけでなく短母音、長母音の区別もなかった。その後、2010年に、ガーナ語の音声組織と並んで改訂スペリングシステムが採用され、*Kaurna Warra Pintyathi* (KWP); Creating Kaurna Language 委員会によって是認された。そして、ガーナ語学習者用ガイドブックと *Kulurdu Marni Ngathaitya!* (Sounds good to me!) とその改訂版であるガーナ・アルファベットブックが出版されたのが2013年である。このKWP 委員会とは、まず、2000年と2002年に開催された一連のガーナ語振興を目的としたワークショップから委員会に発展した組織であり、アデレード大学・人文学部・言語学科、Rob Amery 博士を議長とし、ガーナ語族の長老、Lewis Yerloburka O'Brien 博士と同じく長老の Alitya Wallara Rigney 博士が調印し、世代を超えたガーナ部族の人々、言語学者、教師、歴史家、音楽家の協力のもとに現在も発展を続けている。活動としては、ガーナ語地名、用具調査、アデレード市内の地名のガーナ語訳、式典・行事でのガーナ語によるスピーチ、文化センター等での言語・文化学習等がある¹⁵⁾。

このガーナ語によるアデレード市内の地名の英語とガーナ語による2言語表記や式典・行事でのガーナ語によるスピーチについて Taundi Aboriginal College 文化指導担当者、Jack Buckskin 氏は、言語復興・維持には、その言語を日々の生活の中に取り入れ、重要な儀式のスピーチでも使用し、毎日、耳

にし、目に触れることが必要で、ガーナ語はこのアデレードの土地と密接な関係がある言葉であり、ガーナ部族は全ての起源であるこの土地を保護し、言語を維持する必要があると述べている¹⁶⁾。

この Buckskin 氏も2014年度までは、KWP に所属し、非常勤講師としてガーナ語を教えていたが、経済的な理由(家族の扶養)から KPW を離れ、現在は Tauondi Aboriginal College に文化指導員の常勤として勤務している。また、この KWP と他のガーナ部族代表を主張する組織との関係については、まず、1985年に設立された The Kurna Heritage Committee が発展した The Kurna Aboriginal Community and Heritage Association (KACHA Inc.) を挙げる必要がある。その後、アボリジニ間の不和、派閥争い、内部統治問題、州政府との行き詰まりから Kurna Meyunna Inc. and Kurna Elders が設立されたが、KACHA Inc. は依然として主に Warriparinga とアデレード市内南部の細区分代表として存在し続けた。その後、Kurna Native Tittle (ガーナ土地所有権) 要求が組織化され、ガーナ部族全体の代表としての要求をする必要に迫られ、ガーナ土地所有権要求団体として Kurna Yerta Incorporated が設立され、各グループ内の全てのガーナ部族の人々が含まれることとなったが、最近、さらにいくつかのグループが出現している。これらのガーナ部族代表グループは主に遺産、土地問題に関した団体であり、言語、文化遺産をその視野に入れなければならないのに、そのような項目に優先的な配慮がなされたことは今までに一度もない。2003年には、KWP から自らの存在と概要を伝える手紙がこれらのグループに送られたが、未だに正式な返答も反対を表明する文書もないまま、KACHA Inc. と Kurna Meyunna Inc. の代表は、現在も KWP の会合に参加し続けている¹⁷⁾。

3. 言語復興・維持を促進させるための要素

Yamamoto (1998) は、少数言語を維持、促進させるための要素として以下の9つを提案している。

- ①多数派文化内で言語の多様性の存在が有利に機能すること

- ②少数派コミュニティ内の強いエスニック・アイデンティティ感の存在
- ③少数派言語・文化のための教育的プログラム促進
- ④バイリンガル／バイカルチャルのスクールプログラム創設
- ⑤少数言語話者の教師育成
- ⑥全体的なスピーチ・コミュニティの参加
- ⑦使用が容易な言語教材の作成
- ⑧少数言語で書かれた新旧作品の発展
- ⑨少数言語使用が必須である環境創設とその強化¹⁸⁾

これらの9項目は、アボリジニの言語復興・維持にとって、どれも重要なことではあるが、本論では特に③、⑤、⑦に絞って、2015年、3、9月に実施した現地調査をもとにその実現化に伴う諸問題を実証し、その原因を探り実現化に必要と思われる要素を提案する。

3. 1. 収入安定が保障される少数言語教育の可能性

2015年3月の調査時、インタビュー予定者の一人であったアデレード大学、ガーナ語非常勤教師の Jack Buckskin 氏が不安定な収入のために大学を去り、*Kurna Warra Pintyathi* (KWP) から脱会し、アボリジニ文化指導者として *Tauondi* Aboriginal College に就職したため会うことが叶わなかったのであるが、9月の訪問時には、就職先の College にて、彼から聞き取り調査の協力を得ることができた。

南オーストラリア州内の学校では、植民地時代の初期よりアボリジニ諸語が教えられてきたが、2009年の統計では州内の公立学校の6%の学校でアボリジニ諸語プログラムが提供され、それらは、Awareness プログラムとしての Wirangu 語、Reclamation プログラムとしての Kurna 語と Narungga 語、Renewal プログラムとしての Ngarrindjeri 語、Revitalisation プログラムとしての Antikirinya 語、Arabana 語、Adnyamathanha 語、そしてピッチャンチャチャラ語 (Pitjantjatjara) とヤンクンチャチャラ語 (Yankunytjatjara)

による第一言語プログラム、第二言語プログラムをも含む範囲に及ぶものである。そしてこれらのアボリジニ諸語は、54地区の52校の公立学校と2校の就学前学校で教えられ、その学習者は、4,064人であった。2009年度の学習者数を表すこの数字は、素晴らしい印象を与えるかもしれないが、それに至るまでの現場の教育に携わるものたちの毎日は、これらのプログラムを継続していく困難との苦しい戦いの連続であった。最も大きな原因の一つは、教員不足であり、この問題を軽減するために様々な学校での非公式な教師養成プログラムが実施されたが、いずれもが認定されたワークショップによるものではなかった。徐々に成人アボリジニ生徒の自らの言語を学習したり教えたりすることへの興味が増していき、彼らは、ワークショップ・トレーニングでの公的な承認を求めるようになった。そして、2007年には、アデレード大学が16名の熱心な Ngarrindjeri を学ぶアボリジニ成人生徒に公的なトレーニングを行う認可を得て、Murray Bridge TAFE においてトレーニングが開始された。アデレード大学のスタッフは、学生が履修するための TAFE における単位を見つけるのに苦労したが、入門職業教育 (Introductory Vocational Education: IVEC) での南オーストラリア州認可証 I 内の選択科目 (100時間) としての「アボリジニ語 (Aboriginal Language)」を設定し、同年2007年には、16名の学生が、Ngarrindjeri 語における IVEC I の認可証を取得している。

コミュニティ内の自らの言語への関心が増すにつれて、特に Ngarrindjeri 部族の人たちの公式なトレーニングへの要求も強くなったが、これは長老や若者たちの個人的、専門的な必要性から、純粹に自らの言語についてさらに学びたいという興味心を満たすためという広範囲に及ぶものであった。Adnyamathanha 語は、筆者が Port Adelaide の独立したアボリジニ教育組織である Tauondi College (TAFE) で教えられているが、これは正式な単位にはならない。現在、正式な成人への唯一の言語教育は、語学学校の夜間に開講されている Year 11, Year 12¹⁹⁾に受講登録するものであるが、現在、提供されている言語は、ガーナ語とピッチャンチャチャラ語のみである。しかしなが

ら、教授免除取得を目的としたコースに関しては、2010年には、「死滅の危機にあるアボリジニ言語学習修了」を国家が認定する Certificate III、同言語教授を同じく国家が認定する Certificate IV が、National Training Information Service (NTIS) のウェブサイト上で公表され、さらに新しい Certificate III、IV コースは、死滅の危機にある言語と同様に「強く維持されている言語」にも適応されている²⁰⁾。

そのようなコースを提供する TAFE の一つ、先述の Tauondi Aboriginal College の文化指導員、Jack Buckskin 氏によると、現在、Certificate III のコースを受講している学生は8名いて、やがて彼らはIVに進む予定であるが、ガーナ語教授免状を取得するためのその課程を修了するには、学校での100時間の教育実習が必要とされている。最近は、特に若者の間でガーナ語学習熱が高まってきているが、それは必ずしも自身のアイデンティティのためだけではなく、生活手段としての職業になりうるからである。現在アデレード市内には600以上の学校があり、ガーナ語の教師は絶対的に不足しているのが現状である。さらに、これは22年前の他のアボリジニ TAFE²¹⁾にて、アボリジニ講師にインタビューを行った時にも確認されたことであるが、当時の彼や、このような教育を受けた人たちの中から現在の Buckskin 氏のような模範となるようなアボリジニが一人でも多く存在することが早急に必要とされている。

22年前のインタビューに答えてくれた彼は、自分がアボリジニであることに誇りをもつようになるまでには長い年月がかかったこと、多くのアボリジニが貧困、犯罪、アルコール中毒といった負のサイクルから抜け出せずにいるのを目の当たりにしてきたこと、自分の子供たちがアボリジニであるがゆえに身の回りに起こった不条理なことについては、自分の経験から相談にのってやれることなどを述べてくれた。また、実際に教壇に立つ身として、自身も小学校時代に問題を解くのに時間がかかった経験から、相談にやって来る学生たちに劣っているのではなく、人より少しだけ遅いだけだと説明してやれることなどを挙げ、白人と一緒に学習するアボリジニが子供の時から

植え付けられ、ドロップ・アウトする原因にもなっている劣等感を持つことから救ってやれることなどを説明してくれた²²⁾。

当時と比べ、状態は格段に改善されているとはいえ、2015年のインタビューに、Buckskin 氏は、識字力、計算力の低さから非アボリジニと一緒に学ぶアボリジニが劣等感を持つ傾向があり、これを克服させるために様々な努力をしていること、その説得力ある説明には模範としてのアボリジニの存在が必要であるということ強調している。母語であるアボリジニ言語を教えることが職業につながり、アボリジニがかかえる様々な問題改善の一つにもなるということからも、冒頭で述べた *Muuurbay* Aboriginal Language & Culture Cooperative の成功の例にもあるように単に生徒の学習補助だけでなく、教授技術の発展援助やこのようなアボリジニ教師養成の維持、さらなる充実が不可欠であろう。

3. 2. 使用が容易な言語教材作成 (IT 利用)

Buckskin 氏は、非アボリジニの人たちとともに学ぶガーナ語のクラスにアボリジニが少ない理由として、3.1で示したようにアボリジニの識字力、計算力のレベルの低さからくる学習速度の遅さを挙げている。アボリジニの言語であるガーナ語の学習で非アボリジニの学習者に遅れをとり自信喪失するのである。彼らは、非アボリジニ学習者たちよりも自分たちの言語についてより知識が豊富で、授業もより早く理解するということを示したいのであるが、現実には反対で、常に遅れを取るのが現状である。Buckskin 氏の夜間コースに開始年度時、在籍していた6人という生徒の数が増え続け、4年後には27人の在籍者となったが、そのほとんどが非アボリジニ生徒であった。同様のことを22年前にインタビューを行った南オーストラリア州教育省 Australian Indigenous Languages Framework (AILF) 元担当官、Wilson Greg 氏も指摘していたが、そのような理由から Buckskin 氏は、You Tube でのガーナ語・文化紹介に取り組み、現在、アボリジニに限らずそのサイトへのアクセスは誰でもが可能となっている²³⁾。

このようなIT技術の利用は大きな成果をあげているが、そのうちの一つにクイーンズランド州の南ブリスベン、BeenleighにあるYugambeh博物館、言語・文化遺産研究センターによるクイーンズランドで最初に開発され、2013年に公表されたアボリジニ語のアプリ、The Yugambeh Appがある。South Stradbroke Islandを含むLogan川からTweed川との間のクイーンズランド南東部に住むYugambeh族の男性、John Allen（Bulumm）氏から収集されアプリに入っている約1,000語の語、語句にさらに最近8つの言語が追加されたが、オンラインテレビの範囲にまで拡大される予定で、多くの人が家庭で好きなときにアボリジニ諸語を学ぶことができるようになる²⁴⁾。

4. まとめ

IT技術が大いに期待される理由のひとつには、西洋式教育とアボリジニ式教育方の違いがある。まず、アボリジニの子供たちは、長老をはじめとする大人から、神話を中心とした物語を継続して聞く形式で学ぶ。大人から話されるそれぞれの話は3つの要素からなっていて、それは狩猟民族にとって一番大切な恩恵（食料等）の分配や年配者への敬意を含む知恵、掟で、次の要素は、環境やそれとともに生きていく方法、そして最後がその規則、掟を守っているかどうかを確認するために聖霊がその部族の人々をどのように見守っているかという霊的な世界に関する要素である。まず、第一段階として非常に基本的なレベルで子供たちに話しかけられ、子供から質問することは避けるように教え込まれる。また、西洋式の教育では、子供たちは話を理解したかどうか確かめるために質問をされるが、アボリジニの文化では、子供たちは話し手の大人から観察され、その態度で話を理解したかどうかを判断される。そして次の段階では、子供たちが最初に聞いた話の特別な箇所まで再び戻ってさらに高いレベルで同じ話を聞かされる。さらに、回を重ねるごとにレベルが上げられ、同じ話を聞かされるのである。子供たちが話を無視した時の罰は、もう二度とその話を聞かせてもらえなくなることである。これはアボリジニにとっては、大変洗練された賢明な教育方法といえるであろう。

なぜなら、興味を無くして話をしてもらえなくなり、その話の基礎的な部分しか知らない子供と、最後まで話を聞いて十分に理解している子供の二つのタイプが存在することになり、その選択をするのが子ども自身であり、「自律」というアボリジニにとっての重要なテーマに最も適応した方法であるから。

このアボリジニの二つのレベルによる教育方法の効用は、Sydney 大学元教授、Barbara Theering 博士の The Dead Sea Scrolls についての研究から明らかにされた知識人用にかかれた聖書と一般人用に書かれた聖書の peshet technique の効用を比較して、南オーストラリア州、アボリジニ文化施設、Tandanya の元係官、Michael Diorio 氏から紹介されたものである²⁵⁾。また、子供の「自律」を尊重するアボリジニ社会にとっての IT 技術の活用はこれからもますます促進され、維持、強化されるべきものであるが、遠隔地に住むアボリジニ生徒への教育発展のためにもアクセスがさらに容易なこのような教材開発が必要であろう。また、この9月15日には与党・自由党の党首選挙でアボット氏に勝利したターンブル氏が新首相に就任したが、アボット氏の首相在任期間は726日間という最短期間で、オーストラリアの政権は、この5年間ですでに4度、交代している。そして、そのたびに多大の影響を受けるのがアボリジニ教育に携わっている機関であり、Tauondi Aboriginal College の Business Development & IT Manager, Nakamura Tadashi 氏からは毎回、予算獲得のための政府との折衝に彼を初めとする担当者は奔走させられるという深刻な現実の報告を今回の聞き取り調査時にも受けた²⁶⁾。このような現実からも、Yamamoto (1998) の⑨番目の項目である、オーストラリアにおける「少数言語使用が必須である環境創設とその強化」の実現が取り組むべき優先項目の一つと言える。

(聞き取り調査中、1993年度は、オーストラリア政府・文化財団、豪日交流協会「一般研究奨励金」、2015年3月は、名古屋外国語大学「教育・研究推進経費」研究助成金によるものである)

注

- 1) Australian Bureau of Statistics 2012, Cultural Diversity in Australia, 2071.0-Reflecting a Nation: Stories from the 2011 Census, 2012-2013.
- 2) Aboriginal and Torres Strait Islander Population, Australian Bureau of Statistics, 1301.0-Year Book Australia, 2008.
- 3) Healthy for Life-Aboriginal Community Controlled Health Services Report Card, Australian Institute of Health and Welfare, Canberra 23013.
- 4) Information Officer, Uluru-Kata Tjuta Cultural Centre, Pukulpa Pitjama Ananguku Ngurakutu Pukul Ngalya Yanama Ananguku Ngurakutu (Welcome to Aboriginal Land).
- 5) 筆者のアボリジニ女性講師へのインタビュー（2015年3月）。
- 6), 7), 8), 10), 11) (O'Brien 2013)。
- 9) ガーナ語最後の話者、Ivarityi に関しては、南オーストラリア博物館にその詳しい記述と展示がある。
- 12), 16) 筆者の Buckskin 氏へのインタビュー（2015年9月）。
- 13) (濱嶋、2013)。
- 14), 15), 17) (Amery 2013)。
- 18) (Walsh 2010)。
- 19) Year 11, Year 12学年は、後期中等学校の最終学年、日本の高校2, 3年生にあたる（濱嶋、2015）。
- 20) (Gale 2011)。
- 21) 現在は、アボリジニだけではなく一般学生を対象としたカレッジとなっている。
- 22) Adelaide College of TAFE, アボリジニ講師、Coleman Basil 氏への聞き取り調査（1993年8月）。
- 23) <http://www.roninfilm.com.au/feature/10936/buckskin.html>.
- 24) State Library Website: <http://blogs.slg.qld.gov.au/jol/2013/05/16/yugambah-language>.
- 25) National Aboriginal Cultural Institute INC, 元担当官、Diorio Michael へのインタビュー（1993年8月）。
- 26) Tauondi Aboriginal College Business Development & IT Manager, Nakamura Tadashi 氏へのインタビュー（2015年9月）。

参考文献

- 1) Amery Rob. 1993. Encoding new concepts in old languages: A case study of Kurna, the language of the Adelaide Plains. *Australian Aboriginal Studies* 1: 33-47.
- 2) Amery Rob. 1996. Kurna in Tasmania: A Case of Mistaken Identity. *Aboriginal History* 20: 24-50.
- 3) Amery Rob. 1998. Warrabarna Kurna! Reclaiming Aboriginal languages from written historical sources: Kurna case study. Unpublished doctoral dissertation (2 volumes), University of Adelaide.
- 4) Amery Rob. 2000. *Warrabarna Kurna! Reclaiming an Australian Language*. Lisse, The Netherlands: Swets & Zeitlinger Publishers.
- 5) Amery Rob. 2001. Language Planning and Language Revival. *Current Issues in Language Planning* 2 (2&3): 141-221.
- 6) Amery Rob. 2004. Kurna Language Reclamation and the Formulaic Method. In *Proceedings of Language is Life*, 81-99. The 11th Annual Stabilizing Indigenous Languages Conference. University of California at Berkeley June 10-13, 2004.
- 7) Amery Rob. 2010. Monitoring the use of Kurna. Hobson John, Lowe Kevin, Poetsh Susan and Walsh Michael eds., *RE-AWEKENING LANGUAGES: Theory and practice in the revitalization of Australia's Indigenous languages*, 56-67. Sydney: Sydney University Press.
- 8) Amery Rob. 2013. Kurna Language (Kurna Warra) Website. <http://adelaide.sa.gov.au/subjects/kurna-warra>.
- 9) Amery Rob. 2014. Reclaiming the Kurna language: a long and lasting collaboration in an urban setting. *Language Documentation & Conservation Vol. 8*, 2014, 409-429. Hawaii: University of Hawaii Press.
- 10) Amery Rob with Kurna Warra Pintyandi. 2007. Kulluru Marni Ngattaitya! Sounds Good to me! A Kurna Learner's Guide. Draft Prototype Version. Adelaide: Kurna Warra Pintyandi. [To be published by Wakefield Press, Kent Town, Adelaide.]
- 11) Amery Rob and Buckskin Jack Kanya. 2010. Introduction to the Kurna language 'Strategies' workshop. Presentation transcript: Strategies for Re-Introducing Languages No Longer Spoken to Children and Adults, Session1, In Field 2010 Workshop, 22nd June 2010. Institute on Field Linguistics and Language Documentation, Eugene Oregon. Oregon University.

- 12) Blake Barry J. 1991. *Australian Aboriginal Languages: A General Introduction Second Edition*. University of Queensland Press.
- 13) Crystal David. 2000. *Language death*. Cambridge University Press.
- 14) Devlin Brian. 2009a, *A critique of recent government claims about the comparative performance of bilingual and non-bilingual schools in the Northern Territory*. Ms.
- 15) Devlin Brian. 2009b, "Bilingual education in the Northern Territory and continuing debate over its effectiveness and value." Paper presented to an AIATSIS Research Symposium, "Bilingual Education in the Northern Territory: Principles, policy and practice", Visions Theatre, National Museum of Australia, Canberra, on Friday June 26, 2009.
- 16) Gale Mary-Anne. 2011. Rekindling warm embers: Teaching aboriginal languages in the tertiary sector. *Australian Review of Applied Linguistics*, 2011; 34(3): 280-296.
- 17) 濱嶋聡 (2002) 「少数民族の維持と復興—オーストラリア・アボリジニのバイリンガル教育をめぐる」河合利光編『オセアニアの現在—持続と変容の民俗誌』人文書院 pp.210-230。
- 18) 濱嶋聡 (2004) 第9章「オーストラリア」大谷泰照他編『世界の外国語教育政策・日本の外国語政策の再構築にむけて』東信堂 pp.447-466。
- 19) 濱嶋聡 (2004) 「オーストラリア英語」小西友七編『現代英語語法辞典』三省堂 pp.129-132。
- 20) 濱嶋聡 (2009) 「アボリジニ学校におけるバイリンガル教育—アボリジニ社会のテーマと新たな問題」吉村耕治編『現代の東西文化交流の行方Ⅱ—文化的葛藤を緩和する双方向思考』大阪教育図書 pp.407-412。
- 21) 濱嶋聡 (2011) *Literacy Development of Aboriginal Students*, 名古屋外国語大学『現代国際学部紀要』第7号 pp.119-128。
- 22) 濱嶋聡 (2012) *Indigenous Language Policy in Australia*, 名古屋外国語大学『現代国際学部紀要』第8号 pp.71-80。
- 23) 濱嶋聡 (2013) 「アボリジニ学校におけるバイリンガル教育」日本言語政策学会『言語政策』第9号 pp.149-160。
- 24) 濱嶋聡 (2013, 2014) 「アボリジニの学校で①～⑥」『英語教育10～3月号』大修館書店
- 25) 濱嶋聡 (2015) 第17章「オーストラリア」大谷泰照編『国際的に見た外国語教員養成』東信堂 pp.245-255。
- 26) Harris Stephen. 1990. *Two-Way: Aboriginal Schooling, Education and Cultural Survival*,

Aboriginal Studies Press, Canberra.

- 27) O'Brien Lewis Yerloburka. 2013. Kurna People Website, <http://adelaide.sa.gov.au/sdsubjects/kurna-people>.
- 28) Schmidt Annette. 1990. *The Loss of Aboriginal Language Heritage*, Aboriginal Studies Press, Canberra.
- 29) Shnukal Anna. 1992. *Broken: An Introduction to the Creole Language of Torres Strait*, Australian National University, Canberra.
- 30) Thiering, Barbara. 2006. *Jesus the Man: New Interpretation from the Dead Sea Scrolls*, re-issued in paperback with foreword by Barbara Thiering, Simon and Schuster, New York.
- 31) Walsh Michael. 2010. Why language revitalization sometimes works. In Hobson J, Lowe K, Poetsch S and Walsh M (Eds). *RE-AWAKENING LANGUAGES Theory and practice in the revitalization of Australia's Indigenous languages* (pp.22-36). Sydney University Press.
- 32) Yamamoto Akira. 1998. Linguists and endangered language communities: issues and approaches. In K Matsumura (Ed). *Studies in endangered languages* (pp.231-252). International Clearing House for Endangered Languages, Linguistic Studies Vol.1. Tokyo: Hitsuji Syobo.